

Michael Brooks 著 (マイケル・ブルックス) <Things That Don't Make Sense (まだ科学で溶けない13の謎)> 著者の先生は科学ジャーナリストだそう。13の項目を列挙されている。どれも面白そうだけれど、今回は9) 死く生物が死ななければならない理由が科学ではわからない>を読んでみた。

徐福のことを思い出した。中国の始皇帝 (BC-3) が家来の徐福に不老不死の薬 (仙人・仙薬) をとってくるよう命じた。3000人の男女、多くの技術者、五穀の種を従えて、東方に向かって出航した。日本ではいくつかの徐福伝説がある。中国でも「日本人の祖である徐福は、日本に薬を取りに行くと秦を騙し、日本にとどまり没した。連れて行った各種の技術者のおかげで、日本の道具すべてが、精工にできている。

若い研究者が湿地でカメを捕えた。成長しきったオスのブランディングガメで少なくとも25歳にはなっていた。それから33年後、カメは健康そのものだった。老化すること、時間の経過とともに衰え最終的に死に至ることは、動物界全体に共通する定めだ。私たちの分子機構が時間とともに壊れていくなれば、カメにも同じことが起こるはずだ。脊椎動物では、魚類、両生類、爬虫類、の中に老化しない種がいくつもある。古細菌と真正細菌は性も老化もない。

死の進化を説明する理論：なぜ生き物は死ぬのか。死の原因は何だろう。その答えの一つに、死が必要だから。過密を解消するため。限られた食料資源を奪い合う生存競争がゆえ。遺伝子プログラミングが自己破壊をけしかける。多くの遺伝学研究者が今や不老不死の霊薬 (エリクシル) の発見を目標として、会社の設立にいそしんでいる。

反対に加齢の科学を誤って伝えようとする動き、永遠の若さという約束につられた人への警告：「動物の加齢に、遺伝子の指示はいらない。生殖期間を過ぎても生き延び、あるいは、子供が自立するまで育ててやるのは、進化上好ましくない。

死の起源は「ミトコンドリア」と「性」にある？ :▷30億年前は古細菌と真正細菌が地球を支配していた。古細菌と真正細菌は性も老化もない。▷生物の能力が進化し光を利用して水を分解できるようになった。▷この構成要素は水素原子に含まれる陽子・電子・酸素だ。▷この陽子と電子が光合成をおこないエネルギーが細菌に渡される。▷その時不要な副産物である酸素が放出される。▷酸素は鉄分の豊富な海中で、重く赤い酸化鉄を沈殿させていった。▷やがて鉄分が使い果たされると、酸素が海面上の空気中に漏れ始め、酸素濃度が上がり、酸素大災害が引き起こされた。▷活性酸素が生物細胞に大被害をもたらす。▷24億年前には原核生物は自分自身が起こした改革の犠牲となり、深海にすむ生物だけが生き残り、酸素呼吸などの方法を進化させ、酸素の豊富な環境に順応した。▷単なる順応にとどまらず、酸素をあらゆる生物細胞のエネルギー源 (ATP) に変換するようになった。▷この大発明が盗用の憂き目にあった。▷真核生物が出現し、この真核生物はエネルギーを生成するこの細菌を体内に取り込み、働かせるようになり、ついでに、細菌が酸素の腐食性に対抗できる防御力も手に入れた。▷一つだけ問題がある、真核生物が取り入れた細胞の中心にエネルギーを生成してくれるかわりに、有害な活性酸素の生成機能が備わった。死の進化だ。▷この大問題に対して革新的な解決方法が性だ。死の進化によって、性の進化が誘発された可能性はじゅうぶんにある。▷有性生殖での遺伝子の交換や再編成の過程で、DNAの補修や修復が可能になり、潜在的で有益な新しい遺伝子セットを子孫に引き渡せるようになった。▷真核生物が私たちの遺伝上の祖先になる。

#### 徒然草 第74段

人間はアリのように集って、東西に急ぎ、南北に走って…夜になると眠り、朝がくると働きだす。何のためにそうした生活をいとなんでいるのか。ただ長寿を願い、利を求めてやむときがないのである。しかし老と死はまことに速くやってくる。そんな有り様で人生に何の愉しみがあるだろうか。ところが迷っている人間は、それを少しも気にかけない。というのは、名利におぼれて、死という人生の終点が近いことを考えようとしなからである・・・

キヌさんは六十歳を過ぎた今、どこか田舎で、晴耕雨読の生活がしたい、人里離れた静かなところで、一人で畑を耕して暮らしたいという。資金はある、野菜を作ることもできる、子育ての手も離れた、妻もいない、いつでもできるという。この話を聞き、良寛さんを思い出した。ほかに、社会と離れ、家族と離れ、ひとりどこか人里離れたところにあるあばら家で暮らし、花鳥風月を愛でていた人はたくさんいた。山頭火に放哉、木食に円空、と名前が出てくる。

「テンテンテンマリ テンテマリ」この歌は良寛さんの歌ではないなとおもいながら、良寛さんのことを語ろうとして口もとから自然と飛び出した。二百年三百年前、着物を着た幼い女の子が鞆をついている姿がうかがふ。当時の鞆、昔話の童画にも出てくる鞆、今のようにピョンピョン跳ねるのか跳ねないのか。良寛さんが幼い子供たちと手鞆をつけて遊んでいたという風景が出てくるが、どんな歌を唄っていたのか踊っていたのか。頓知の一休さん同様作り話なのか本当の話なのか、おとぎ話の世界としてよしとしましょう。

良寛さんは、今の新潟県出雲崎で身分の高い裕福な家に生まれた。親兄弟も家業に商売に熱心な人たちではなく、俳句の道などにいそしんだ。良寛さんは長男としてその家に生まれ育ったが「家業には向いていない 出家をしたい」と近くのお寺で暮らした。二十歳ぐらいになったころ、岡山県の玉島にある大きな寺（円通寺）の傑僧（国仙上人）が全国行脚の途中、良寛が修行している寺に立ち寄った。連れて行ってくれと頼んだのか、この小僧をお連れ下さいと住職が頼んだのか、傑僧が所望したのか、わからないが、その縁で、良寛はその傑僧に連れられ、岡山県の玉島にある円通寺、福井県の永平寺と流れが同じ禅宗の寺で三十いくつまで修行をする。

伝記は彼の和歌・漢詩・書を参考に作成されている。この修業時代の十余年の記録がほとんどない。修行終了のころの詩に、「人と交わることもなく ぼっとしている」というぐらい。以前読んだ本に、永平寺でしばらく修業をした若者の手記があった。入門を頼む一日目から荒坊主に蹴飛ばされ容易に入れてくれない。何日かめに中に通され、怒鳴られ蹴られ修行が続く。長時間の座禅、規則正しい生活、粗末な食事、用便から風呂まで決まりが続く。「身体がすっかり修行のスタイルに はまっていった 何も ほしくなくなった」と手記には記されていた。百年二百年前の良寛さんの時代も、もっと昔の道元、一休の時代も、禅宗の修業は似たようなものかな。寺で長年修行が終わると“偈”という書き物が師匠から与えられる。裏山で切ってきた枝で作った杖が添えられた偈には、「おまえはこの杖で 歩きまわれ どこえなと行け うろうろせよ」なんてことが書かれていたとか。

玉島の傑僧にはたくさんの弟子がいた、彼のもとで修行した僧は各地の寺の住職となって権勢をふるったのでは。良寛さんは、いい家の子として生まれ、有名な寺、有名な傑僧のもとで修業をし、和歌、漢詩、書という教養を身につけ、そのまま素直に出世街道を歩けば、大きな寺の住職にも、上人にもなれたかもしれない。良寛さんは玉島を出たあと何年か四国、近畿と放浪生活をし、故郷の出雲崎に帰った。故郷では見知らぬ村人の粗末な小屋を借りて寝泊まり、そのあたりを托鉢、乞食生活をしてきた。「あれは かの家の 息子じゃないのか」とうわさが広まり、弟が「なんともみっともない生活 まずは引き払って 帰ってきてくれ」と飛んできた。76歳で亡くなるまでの間、生まれ故郷の近辺で、時には寺のはなれ、時には粗末な庵に棲み、生涯乞食をして暮らした。彼は禅宗の坊主だけれど、禅宗を離れ、仏教者として生きた、その当時から「あの坊さんの 字は すごい」という評判があったらしく、うちの店の看板に、屏風に、掛け軸にとせがまれることが多かったが逃げ回っていた。酒好きの彼は書の謝礼でも乞食でも酒ももらっていたようだ。飢饉、地震と災害の多かった時代、乞食、歌、漢詩、昼寝、市井の“かわりもん”で通っていたと思う。まわりの人たちは「しかたがないね ほっておこう」というふうに接していたのかな。酒に酔い、花鳥風月に酔い、宇宙に酔う日々。晩年、若い尼さん（貞心尼）が訪ねてくるようになった。庵に訪ねてきて、話をし、泊まって帰ることもあった。これが、子弟愛なのか、恋愛なのか、愛人なのかわからない。かの一休さんも、晩年、盲目の女芸人（森女）と暮らし、こちらはほんまものの愛欲の世界を楽しんでいる。「そなたの身体は すばらしい」「そなたのマタグラは すばらしい」と恥ずかしげもなく、詩に書き残している。良寛さんと尼さんが、どういうことだったかは知らないが、晩年の良寛さんにとって、東北の極寒でほんのり暖かい純毛の毛布を思ってしまう。

ふと立ち止まると、今年も半年が過ぎてしまった。今、安威川の河原に来ている。川の中州に生い茂る“芦”か“葦”か“スキ”本当の名前はわからないが、青々大きくなっている、2メートルとか3メートルとかいう高さ、対岸の土手さえ見えない。盛夏は2か月先、まだまだ快適な風が吹いてくる。毎日来ているのに2月か3月の枯れた葦がいつの間にか青々しているこの進み具合を見逃していた。ニュースの一つが、今年になって、マムシだけを3度も発見。動きが鈍くニョロリと去っていった。ピンクやら白やらの草の花が密集しているのを写真に撮ろうと、ウエストポーチにカメラとICレコーダーを持参でやってきたが、草刈り造園屋部隊が全の草を刈り終ってしまった。

昨夜は教室の日、みなさんアトリエに絵を描きに来られる日、たまたまカンちゃんが「遊びに行く それじゃ少し飲みましょうか」ということになった。カンちゃんはオレより六七歳年長、今年は関西大学の大学院に合格され忙しく考古学の勉強をしておられる。京都で発掘された貴族の館、テーマはその館の寝殿造りの建物のこと「寝殿造りと庭園と池の関係」なんてことだそうだが「その館にあるべきはずの池がない 寝殿造りと庭園と池は一体ではないのか これをテーマに進めていこうと思う」とおっしゃる。「そんな仕様もないこと」と思いつつ、いかに仕様もないことでも、すそ野を広く調べることによって別の視点、新たな観察が生まれるのかもしれない、否定はいけないと反省。「学生は 金がかかる 小遣いがない 次の年金まで本が買えない」とぼやきつつ、何歳か若返り楽しそうである。

カミサマは十歳下の女の方、50号の水彩画を2枚進めておられる。時間があるので7時ころまで付き合っていた。植物を描くのが好きで、竹、タロイモ、ハス、と描き終り、最近はおっぱら植物園の温室の熱帯植物をターゲットにしておられる。京都、鶴見といった植物園に同道しスケッチとカメラ撮影をもとに下図を作って描いている。今年のテーマは大鹿の角のようなシダ、どこが胴体で、どこが葉で、どこが根なのか、おそらくジャングルの上の方に着生し、大きく葉を広げているような植物。楽しげに描いておられる。

清子さんはいつも5時には帰られるので、お酒は付き合っていただけなかったが、アラカン(還暦)の彼女も「油絵が描きたい」「深海魚 シーラカンスがいい」と油絵と深海魚のテーマは決まっている。シーラカンスを中心に、海があり、都会があり、空があり、宇宙があり、テーマは時空を超えておおいに広がっていく。「ナイフを使って 絵の具を 乗せてみては」「アレレ うまくいく」今日、新しい発見をされた、ややボケ気味の画面が、要所で決まりだした。今まで停滞気味だった歩みに新たな発見をされた、次のステップが楽しみ。気持ちも身体も大きく、おおらかで楽しい方だ。

離れる“離”という話題になった。人から離れる、社会から離れる、仕事から離れる、家族から離れる、今まで生きてきた自分自身の人生を構成していたまわりとの関係、そのどれかと関係を断つ、離れる、離される、これを受動的ではなく能動的に敢行する、「永らくお世話になりました」と去っていくのか「もう おまえらとは縁を断つ」と怒気を含めて蹴り去っていくのか、ただ黙って「さようなら」と去っていくのか、おもしろそうな場面の数々が目に浮かぶ。死や病氣や災害などは当然ながら突然の別れがやってくる。これは誰もが受け入れなければならないが、普通に、普段生活を営んでいて「これでは いけない」「ここで 私は 道を たがえなければ」「こちらに 私の 歩む 世界がある」とそれぞれ考え、今までの自分から離れ、新たな歩みに出発する。地位も名誉もカネもある社会生活、職場を離れる、仕事を離れる、地位を捨てる、財を捨てる、「そんなことは できない」「とんでもない」「人間 そう簡単に 捨てられるものではない」地位も名誉もカネは捨てられない、丸裸にはなれない。自分が社会にかかわって「私の会社」「私の仕事」「私がいなくなったら どうにもならなくなる」「私がいるから ここは うまく回転している」「わたしは 皆様から慕われている 必要とされている」「これを断ち切れれば 私も終わる」こんな言葉もよく聞く。オレも捨てられない、離れられない、絵・家族・アトリエ・今の生活、もっと欲しい、あれが欲しい、これは嫌だ、俗だねえ、オレは。

水彩画のことを water とか water color painting という。絵描きなら水彩絵の具といえば「透明水彩絵の具、ガッシュも入るかな」と思っている人が多いが、最近のアクリル絵の具も、水彩だという人もいる。ほとんどの日本人は、初等教育で美術・図工・絵画というような授業を受けているので、水彩絵の具のことはよく知っておられるはずだが「もう半世紀も経ってしまった 忘れてしまった」というような方のためにひとくさり。初等教育で使った水彩絵の具は、ガッシュに近いもので、大人が使う専門家が使うものは透明水彩絵の具、ほとんどが絵の具専門店で売っている。小・中学校での水彩絵の具は、文房具屋で買う。透明水彩絵の具は色・発色がきれい、薄く使っても、濃く使っても、思い通りの色が出る。オレはへそ曲がりではないが、複合材料、油性クレヨンで線を引き、透明水彩絵の具で色を塗り、ガッシュで色を塗り、アクリル絵の具で色を塗るといったような使い方をしてる。

ひと月ぐらい前から、10年20年前に描いた水彩画の修繕をやっています。毎月絵をリースで貸し、お金をいただいている箕面病院に、昔の水彩画も持って行くが「このさい 昔 描いた水彩画を 全部出して 修繕しよう」と思い立ち一つの袋に入れた50枚ぐらいを出してみた。この修繕という言葉、電化製品か機械ものが壊れたのを修繕するという雰囲気と言葉がそぐわないね、修正？推敲？添削？補正？違うねえ。

アトリエの横に小部屋がある。小部屋といえば格好がいいが、三角の屋根裏、腰をかがめて真っ暗な中、たくさんのガラクタをかき分け奥の方に、ビニール袋になん十枚かずつ入れ積んである。さて全部で何枚あるのかねえ、積み上げると1メートルはいかないか、50センチは超えるねえ。ほとんどが300グラムのモンバルキャンソン紙で描いている。大きさはA1サイズもあるがこれは少ない。ほとんどがB2・B3・A2・A3サイズ。描くときは、B2・B3・A2・A3サイズの木製パネルに水張りをし、端を折り込んでホチキスで止め描いている。描き終るとナイフでB2・B3・A2・A3サイズに切り取る。

まず手っ取り早く出しやすい一番上に載っているB2サイズの袋を取り出した。厚さは3センチぐらい、さて何枚あるか、50枚ぐらいかな、アトリエの床に並べてみた。「うわわ」と思った、これはほとんどの絵を直さなければ、いくつかを修繕が必要だと思った。ほとんどの絵を覚えている、「なににインプレッションを受け なにを描いた絵 描きながらどこで苦労した どこが上手くいった いい絵だ これは良くない これは箸にも棒にもかからないねえ」と独り言を言いながら見入った。1990年後半と2000年前半の絵が多い。収納するときには多少年代順に整理したはずだけれど、20年の間に何度か出し入れし、順不同、傾向も違う、テーマも違う。風景、人体、人物・・・。

水張りは、紙をたっぷりの水で濡らし、1~2分経つと伸びてくる、それを引っぱりパネル張りにする。画用紙が平らにピンと張る。水っぽい絵の具で描いても、乾けばピンと張る。描き終わったらナイフで切り、紙一枚の作品になる。水彩画の修繕は技術的にむづかしい。紙一枚の作品に水っぽい絵の具で加筆すると紙が波打つ、これは良くない、筆で水っぽい絵の具を使う修繕はしたくなかった。コラージュ技法か、逆コラージュ技法か、色紙を絵の上から糊付けする、絵をナイフで切って穴をあけ、裏に色紙をあてる。どちらかにしようかと小さい色紙をいくつか切って絵の上に並べてみた。思い切って絵にナイフで穴をあけてみた。絵に穴をあけ、裏から色紙をあてる、「よし 逆コラージュ技法にしよう 紙を買おう」と彩美堂に走った。白・うすいグレー・黒と全紙大もミューズ紙を買って試してみた。「絵の ここは描き込みすぎている ここは汚れている」というような個所にナイフで穴をあける。裏に紙を置く、白い紙、グレーの紙、もう少し濃いグレーの紙、黒い紙、と裏の色紙を変えてみる、ぴたりとおさまる色がある。死んでいた絵がよみがえった「これはいい もっとやろう」と続けてもう一か月が過ぎた。倉庫から出てきた水彩画が、アトリエのあちらこちらに積み上げられている、最近ではコラージュ技法以外に、水っぽい絵の具で加筆もしている。「ええい 棄ててしまえ」という前に、筆を走らせている「水でボコボコになれば 寝押しで 何とかしましょう」ゴミ箱に棄てた絵は数すくない。撮影し、整理し、収納している。この作業で今は夢中、楽しい。

10:15 空を見上げると青い空にうろこのような白い雲、数日前からの天気予報、この日だけ“おひさまマーク”がついていた、この日が近づいても相変わらず、おひさまマークが残っていた。梅雨の今の時期、予定した日だけが晴れ、何日もその予報が崩れないとは珍しいこともあるものだと言っている。雨が降らないと夏まじかのこの季節、日差しはきつい、登山口の駐車場に並んだ20台ぐらいの車の上に陽が降り注ぐ。榊井君にソーメンを予約していた、2年ぶりぐらい、相変わらず元気でうれしそうな笑顔を見せてくれた。前日から「榊井君との ツーショット 撮ろう」と予定していたが話に夢中になり忘れた。濃い緑、横を流れる川の音、林道を少し行くと登山道に、4.5回の渡渉がある。日差しから木陰に入るとしばらく目が慣れるのに時間がかかる、日差しがきついから、明るさと暗さの差がありすぎるからだ。「パイパイ・ポーポー・ヒョーヒョー」「ゴーゴー・シャバシャバ」

明神平までの2時間、斜面をジグザグに高度を稼ぐ。荷は軽い、雨具の上下・弁当・水筒・コーヒーセット。コーヒーは最近わがアトリエではやりだし、「豆が 粉が」といっぱしの話、山でも湯を沸かしドリップ形式で入れている、たしかに旨い、荷の軽いときはこれを楽しんでいる。コーヒーの話になるとみなさん、蘊蓄を述べられる方も多い。オレは初心者、マイルドな普通のがいい、あっさりソフトなものがいい。今日はTシャツのかさね着、タイツに半ズボン、まだ真夏のように汗は流れ落ちてこない。ずっと雨の日が続いたのか、地面は湿っている。

今日の靴は30年前の靴、3度も底を張り替えている。高い靴だったが、買った当初から水に弱い、雨や渡渉で濡れるとたちまち中まで濡れてくるので、二日三日と山の中を歩く連泊には履きたくない。ゴム長靴も去年から履きだした、低い山、水バシャバシャの渡渉の多いところは重宝するが、とがった石を踏むと足の裏が痛い、一日中履いていると汗で中が湿ってくる、長時間はつらい。新しい靴が欲しいと先日見て歩いた。登山専門店のロッジの兄ちゃん「冬は4万5万の靴でないと12本爪のアイゼンが 締まりにくい」「2万3万は スリーシーズン用に なります」あと何年登るかわからないが、2万円台のやつを買わないといけないかねえ。

下の方で聞いた鳴き声「パイパイ・ポーポー・ヒョーヒョー」新たに別の声が聞こえる「ミーミー・ゴエゴエ・キッキキキ」樹林の中、叢の中、セミや虫も加わったかな、なかなかにかまびすしい。先日「シカが増えすぎて困る」という話を聞いた。この10年20年でどんどん増えているらしい。天敵の狼がいなくなったから、というのが、狼がいなくなってからもう100年も経っているのに説明がつかない。イノシシ・クマ・カモシカ・サルなどがシカ同様には増えていない。先生がおっしゃるには、シカが増えたのも、害が増えたのも、人の生活が昔と変わってきたから。昔のように人が山に入り、木の世話をし、枝を切り、炭を焼き、草を刈り、山での生活をする人が増えたらいい。人が昔のように里山とかかわりを持ち、里山に住み、山に入るようになれば、シカも減ってくるでしょう、とおっしゃる。

檜塚奥峰にやってきた。明神平で弁当をすませたあと、前回の天狗岳同様、わがまを聞いてもらいマサコさん同道で2時間強の時間をいただいた。このてっぺんへ冬に来たときは木の幹に枝に雪が突き刺さり、風が舞う真っ白な世界だった。今日は穏やかな景色、まわりの山々が重なっている、強風で背が低くねじ曲がっているブナの木肌が美しい。5分ばかり休憩、景色を、風を、山を楽しんだ。勝手を言っただけで「2時間」が「3時間」になってしまった、「来た道を 戻ればいい」と地図も見ずに歩いていた、2回も迷ってしまった。澤山・衣川、両氏がいたら「岡村さん またやってしまったね」と大いに揶揄されるところだ。この辺りはだらだらと平らなところ、赤いリボンがついているが、踏み跡もたくさんついている、同じような木、同じようなヌタバ、右へも左へもいけそうななだらかさ、「国土地理院地図と磁石がなかったら」とひやり。一度目はこっちだと登ったら、逆走していた、キツネにつままれた思いだった。二度目はリボンを頼りにルンルン歩いていたら、急な下りになっている。「ここは通っていない、ここじゃない」この後は磁石を出し地図を出し逆戻り「ここじゃないの」と背中を押され「かもなあ」と頭をかしげながら歩いた。1時間も迷った末、仲間が待っているところにやってきた「ごめんなさい」である。

南海電車高野線、難波発：橋本行きの電車に乗っている。10日ぐらい前、ヒゲさんから電話がかかってきた。「カミさんが亡くなった 4月に亡くなった」「えええ」いつものこと、早口に一人でしゃべっている。ヒゲさん夫妻はともにやせ型で訃報など思いもよらなかった。去年ぐらいに「夫婦二人で高野山へ行こう 宿坊に泊まろう」と楽しみにしていたらしい。ひとり身になった今「さびしくて さびしくて 毎晩泣いてる」「高野山の宿坊 おまえと一緒にへ行こう オレは カミさんの写真 もっていく」ということで高野山宿坊を検索してみた。調べるとなんと高野山とは一大観光地、宿坊といえども温泉宿と同じ、違うのは精進料理であることぐらいじゃないのかな。宗教の一大聖地であるとか、修行の場であるとかいう雰囲気はない。「こんなことではいけない もっと厳かに もっと密やかに 心や想いの思索の場でなければいけない 金や 威風や 華麗さ ばかりを追ってはいけません」と嘆いている御仁もどこかの隅っこにおられるかも知れないが、高野山という街は一大観光地として大いに盛り上がっている。ネットで宿坊を検索したが、和室一人二食付きなら1万円以上の宿坊ばかり、「オレは 同道しない 翌日 高野山に迎えに行く それから 我が家に泊まってくれ」ということに決まった。

ケーブルが高野山駅に着いた「バスよりも 少し歩きたい」駅付近に立っていた制服の人に聞くと「こっちは人の通行はダメ 歩くならそっち 大門方面です」という。何のことやらわからないままに車道を歩いた。ヒゲさんに「二人分の弁当をもって高野山に行く」といっていたが、前の晩の天気予報では雨模様、雨の中で弁当でもあるまいとにぎりめしだけ持ってやってきたが、薄日が差してきた。まわりはガスで白っぽい、木々の緑がきれい「雨だと思っていたが 晴れていますねえ」「いえいえ 朝まではすごかった 大雨だった」道路に立っていた工事のおじさん。山の形に沿ってくねくね曲がる道、「この道は 高野山市街地に向かっているのではない？大門とは？」市街地に行きたかったが、バス専用の道、南海電車の策略か、必ずバス代を払うようになっているようだ。それでも払わないやつは、大回りせよということかな。宿坊もネットで検索すると「高野山の宿泊 宿坊は高いというが 安い宿坊もあります」というサイト、十軒ほどの寺の名前が書いてある、いいサイトを見つけたと喜んで一軒一軒検索したが、二人一室朝夕食付で1万円近い、一人一室になるともう少し高くなる、格安というのは、極寒の季節、食事なしで六千円。こういうことばかりを目にすると、厳かな高野山なんておもい、百年の恋も冷めてしまう、がっかりするねえ。寺も宿坊という名で観光客を泊める旅館業を営んでいるのだね。それなら1万円なら安い方だね。大門とは街の入り口の門だった。

「金剛峰寺の辺りに いてくれ」と前もって連絡していた、オレは携帯電話がない、高野山の街にはお洒落で和風な電話ボックスがあったと記憶していたが、大門からしばらく歩いてもボックスがない「金剛峰寺まで500M」という標識が出てきた辺りで見つけたボックスに入った「もう前に来てるよ」「10分もかからない」5年ぶりに会った。開口一番「この街は素晴らしい 気持ちが変われる」と嬉しそうにいう。いきなり炭の話になった。「炭焼きの貧乏つたれの息子だった 子供のころから両親と 窯のそばの小屋で 暮らしていた」彼の一家が焼いていた炭はさほど上等ではないという。「親父が病気になれば 母親や 兄弟と炭を焼いた」という。「山の一軒家にも 一人でいても こわくない」という。炭とは、木の幹・枝などの有機物を、蒸し焼きに、不完全燃焼をさせてできた炭化物だという。日本列島では新石器時代から使われていた形跡があるという。ナラ・ブナ・カシ・クヌギ・近代では竹がいいという。「サルスベリも いい炭ができるよ」と彼がいう。

ヒゲさんとは二十歳ぐらいからの付き合い。今も昔も鍾馗（しょうき）さん風の髭をたくわえ、小さい身体、細い身体でひょいひょい歩く。先日も東京で「美術館のような 個展をした」というが「売り上げはゼロだった」ともいう。30歳代に5Mもあるようなぼっちゃり裸婦の粘土立像を5.6点造った。和紙の紙すきも始めた「自分の作品は自分の紙で」絵の具もピグメントを練って自作していた。彫刻の鋳造もやっていた。彼は何でも自分でやりたいという人なのだ。「カミさんがいたから やってこれた オレと子供に 金を残してくれた」「売れなかったが 作品群の 財産価値は高い 一億円 いや 二億円・・・」「もう会うのは 今回が最後かもしれないねえ」と駅で別れた。

福井北ICから1時間、勝山市の東山いこいの森にやってきた。想像していたより小ぶりのキャンプサイト、山の上の静かなところ、こんなところならオレも楽しめそう、今の季節は人が少ない。10人ぐらい泊まれるコテージが13000円、バンガローが3500円、五右衛門風呂が300円、シャワーが100円だそうだ。管理人の方「ママシを食った」と彼のブログに出ていたので「どんな型破りの方だ」と想像していたが温厚で親切な人だ。そのおやじさんに歳を尋ねられ、オレと同年輩とわかると、アルバムを見せてくれた。彼はこの近所で生まれ育ったとかで、昭和31年ころの写真が何枚も。雪に埋もれた生家、昔懐かしい日本の家、当時ここは人里離れた雪深い山国だったようだ。幼児の彼も写っていた。20歳代30歳代のハイカラスキーヤーの写真、朝日新聞の人たちだという、モノクロ写真に写ったその方々、今存命なら百歳に近いのでは。何年か前の関西学院の学生が雪山で動けなくなった遭難事故は、ここの取立山だとも話してくれた。あの事故は、白山だとばかり思っていた、

飯まで時間があるので、取立山を散歩しようと出かけた。気が駆け巡る。今、天に向かって、今、地に向かって、駆け巡る。おそれいった魂が、じめじめした地中にもぐる。恐れ・おののき・悲しみ・哀れみ。そんなことを思いながら歩いた。ガクアジサイ、これは我が家にも咲いている、同じものだが大自然の中でぽつりぽつり、絵になるねえ。白いタンポポ、クマザサ、これはカエデ、これはクリかクヌギか、ハート形の葉はなんだ。向こうの山の上だけが明るい、空の上はどす黒い雲と思ううちに降りだした、「にわか雨だよ」「それでも30分はやまないよ」「雨具の上を着ていたすかった」

小屋の中で食事の用意が始まる。お二人にまかせてふらり外へ。向こうの山の陽が沈み始める。朱・オレンジ・黄そんな色が山の上にかかり、少しずつ暗くなっていく。チーチーこれは何の鳥、フクローのホーホー。「陽が落ちる この10分 15分 この光がきれい」中西プロの話の思い出すほどに美しい。

昨夜はたくさん酒をいただいた、旨いものがたくさん出た、ぱたり寝た、朝までぐっすり寝た。朝食は、アルファ一米のかゆ、昨日の残り物、オレひとりたくさん食った。「今日は 取立山と 赤兎山 どちらに登りたい」「赤兎の上にある 湿原はいいよ」「ならば赤兎」と出発の前に支払いに寄った。管理人のおやじさん「写真を撮る」「あれれ ブログに載せられるな」帰って見てみると3人並んだ写真がでっかく載っていた。坂道を下って国道に出、すぐに「赤兎登山道はこちら」を入っていくと、道にくさりがある。おじさんがひょこり出てきた「一人300円」和歌山といい福井といい、土地があれば駐車料金、道があれば通行税、こういう風潮なのかねえ。今までは山に行くと、迷惑にならないように車を止めて山に入った。林道もいくつも通ったが、有料のものはなかった。「一日 門番して いくらにもならないねえ」と話しながら、長いくねくね道が続く「これだけ走れば 900円も 値打ちがある」と駐車場に着いてびっくり、なんと車だらけ、50台以上車が止まっているこれはすごい、10万円ぐらいの収入なのかねえ。もうひとつのびっくりが、車を降りた人たちがみなさん挨拶をしている、呼び合っている、みなさん顔見知りの仲間のようだ、不思議な光景だ。クマのことを心配していたが、この人の多さでクマもあきれているかもねえ。

今日は小原峠から登った。頂上までは樹林帯、たまに向こうの山が見えるだけ「こんな 毛のある山は 嫌だよ なんにも見えないよ」とは昔の山下さんのフレーズ。てっぺんに上がると360度見渡せる。狭い山頂、20人ぐらいの人、地元の人、同じ町内か親戚かと思うほどに親しげにかまびすしい。聞くと赤兎はいつも人がいっぱいだとか、親しくなったおねえさんに人の少ない山はと聞くと「赤兎・取立はバスも入る あとはすいている みんなどの山もいいよ」と教えてくれた。1600M、高くはないが冬の風雪がきついのか、大きな木はない。ニッコウキスゲ(黄色いユリ)ウラジロヨウラク(初めて見る)と地元の皆さんが教えてくれる。福井の皆さんはすぐに仲良くなれる、次回はオレも仲間かも。赤兎の頂上付近、広々平坦な草原、池も大小いくつか、避難小屋もある。澤山・猪熊・衣川・オレの4人、雪の残る季節にここで宿を借りた。前回は今回と反対方向から登った。1時半に下山して駐車場。天気予報どおり曇ってきた。向こうに見える山の緑は濃い。教えてもらった花、見たことがないものもあった、名前を聞いたが右から左、沢の音、鳥の音が聞こえる。まっすぐ大阪へ帰った、我が家には8時過ぎに帰った。